

Kodak
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres



面影莊子

二

特
13
332
2





面影莊子卷之二目錄

一 始皇封松しやうわう ふうしょう

一 蟻蚋自得いぐの じやく

一 墓目傳授むめ の だんじゆ

一 伏翼兩端ふつよく ねんたん



面影莊子卷之二

332
2

門人曾
號
卷

面影莊子卷之二目錄

明治三十六年十月十三日
坪内祐三氏藏

面影莊子卷之二

始空封松

東京市立大塚
餘正堂藏

秦始而手希秦之に清幸の時暴に大夏
其後松を封して五を更乃位松授く
てはらぬが彼松の更に收むる色を赤淡

久つて飛鳥り中にも桐の木進よりては汝何と
てまのる色ありや姫皇帝の唐士四百餘別り
主ちり万葉の志にまの位を授らるは汝
が万代もこの大まなすむむや古くより帝王
の御さわれどもを情の草木に友位を授る
後いしきまきし我の桐の木された友もさく
位もさくやうく出世とよの琴にあらつて貴人
高位のよき事にあらもどやむも唐士の神農

氏の琴を作り給ひし我材を用ひ給ひ
周の成王の叔虞を晋に封じ給ひし桐の
葉の盟約ふよの張華が石鼓を識り桐の
本り徳也茶色に人出されて焦尾琴乃右
物とありしも我の徳ありし人もま
汝がく位を得ば汝賤を身とて位を授
らるるもまのる色ありや不実たりや不口やねが
ま不実ありしに非ず我の子孫のよきを保

西遊十卷之三

三

して之冬にも其葉を度す四時を貫して壽
 命の永くすまに好くも松栢乃凋に後ると
 幼れと老より徳行に孔子の好む後し菊と
 友として陶淵明の三径乃一にわづら其外
 故人松を鉢とるもすま一日を以て阿古
 屋乃松の出羽の圃に名を得武隈の松を陸
 奥に名を止じ編葉ふ乃松の幼平飯沼乃
 歌別をうらも骨根乃松の官相公の遺本

として其名四海に表り高砂の名今に朽す
 其外名木乃名を得多詩人に賦せしを放
 人に依せしるも其粒をり色志うるに旅白
 帝我法にまよりて海を防の悪湯とす
 古史の封ありとく我乃以て大とさる不仕
 合ちりしゆの禹湯文武周公孔子亦んあ
 聖人に位を授らるるが我乃万代の叙模面用
 なるべしは彼皇帝の聖人乃徳業を破

了儒者を埋教し聖人の遺書を焚くや
り箕歟のはをえて氏を若先惡逆を道
乃帝王たりやうの悪人に封せしめて我
を慶とせんや一士の瑕瑾こそよりこころ
し今不仁不義ありのれ黄金穀万石を
清んより賢徳ある人乃録之文に如ず不仁
不義の者に録せしむるは我身を穢
たり去らざる褒美せしむるは人の心に詛
辱る

我事あり好事もあれば如ず我の褒
もるたり詛辱もわたり但褒と詛辱の
糸に疋ぐべしとせば法本志と懸頭を
観るよして悔り去

○蟻斬自得

蟻の虫ども茶村により集り録との勢と自
懐に心持し中にも終虫蟻斬に謂をゆ

四時乃物變氣候乃代謝交天地乃回
 行もて其時節なりもにわらわらけれ
 別して物之氣にむく冷風万物に
 系物多し中に詩人歌人迷用乃情を
 その虫乃を考にせりもゆ秋の
 氣に色が秋なり金正月の色化して
 うらりに吟ども茶村にふじたり不
 や汝の竈馬聴く兒に秋の似れた一

事能らずと茶系を起すなり茶を
 て命瓜はるぐの也汝何をら茶と
 や埃折もと頭をおふらて汝の
 に吟をりて茶と秋の吟をら茶と
 に金鏡見知つて云虫の秋に吟を
 人の茶煎にも吟の詩歌吟の種と
 され汝が吟なり汝茶ととら茶とい
 斬ぐ云は汝らの斬らんと吟は

人の世をとりあふ論をいとも其世をとりあふ
 修りに茶村を捜し汝ら孤尋ひ求めて
 竹影にや入軒端にぞうはうして汝らが愛
 しく吟をりてあそぶ也汝ら曠しく茶村に
 居て自由自在に起あそびて吟あそびと激
 しく茶影に入らもて居るともつらもぞる茶村
 に在る吟あそびの悦ぶまじや茶影に入られ
 て吟あそびと激にあそぶ也其樂吟と悲吟と

月どりの人の耳を悦ぶむらり茶とあつこも
 汝が若人の樂にあつこも非どる汝に茶影
 中の若痛に堪守しく飲おふ死しく其死
 然を得にゆ人に周回以下され腐刑り死
 とりりの世どりこれあそび汝とる茶と我
 い生得あつこもゆ人々も其悦せ守るも由に
 茶影にや入つこも若痛もく氣は氣は
 茶村を我物として居る也命殺るも死



石上生松

石上生松

ともした茶村に死し生れども小其所と成
 て外に求む事なきも我らざるを以
 ち一生涯あひ所成りされが人間の世り
 住るもさぬくにて或は鯀の如く蟹れごとく
 蛇の如く蛙の如く鯀の濁蟹の横つら蛇の毒
 を含蛙の躁く穴を以て居るも相事して強
 の弱をのを嘯くこと市井小民の面影
 たり賢知ありもの鯀の如く鯀の如く蛙の

ごとく鯀の如く神化をれたてに外に求む事
 なき鯀の鬚を敷して雷となり海を噴てる
 ところども小比治をどの中に住る事能く
 地に形が水浸すよに形を石を海に勇獲
 あれは海に入ば大魚の餌となりては
 知ありたの雨成たりも聖人の話の如く
 神妙不測にて鯀ももまじく鯀もも化し
 鯀ももたり鯀ももたり大いして人にも

ころ小にその芥子の中にも儲けりる故に
先聖の易を演繹しに其徳の徳をもちて大
人に配し終る易の道の後述の故に其先を
於て柔なりを貴い賢知ありた其志を
善くみづらに用いざるにあり古より賢知の
人乃其賢知をもちらに用ゆらによつて是とそ
とものまじり終る終る比干の心と割と
精光の河に身を投じ原の涸羅に沈じこれ

ら其我を我ととり乃我見ありふしん
あり孔子の六十にして耳解すこの終る
年六十にして我を我ととり乃我見紙
を後す明も也をその母の道に賢知
ありともし終る終る終る老子の所謂
先同終るもたなり翽翽の其を乃らら
とを善く終るに其の其を善く終る
りごとく其を教す賢知ありた其の其を

をりつてことと終り害を拓く汝らもやの
ごごごごごごごごごごごごごごごご
に入らるる若痛をもぬれず我つふ取の庄
みぐ人回世の意味也といひ終て起るなり

○ 養月傳文

東軒快翁弓に神妙を得たり一得齋これ
を師とて射法を學ぶ汝も一得齋の法

を傳授せり遠其隣の老に物附てごご
罵つねつり妻子の敬大さるる一得齋
ねは忠いずと妻子に謂て云我養月乃
か術をりつてせが縮之何のをも井を子適
らる古物也とも早速に落とべると曰と終に
其日にされがね多の入集りるる一得齋本
つて養月の法をるせごも物に文に落す
及て言つてもよて云汝が養月の法も

思かそちしつらに定まり墓むすめ月つきを御ご音ね古こして有あるべし
 亦また見み名な分ぶんを奉ほうじて脱だつ却ぎやくり墓むすめ月つきに
 我われを返かへしつら計けいの亦また脱だつ乃すなは皮くわ乃すなは厚あつ私しも
 ごとちり意いにえと意いに罵ののし言ことばとら
 一ひと得とく舟ふねの墓むすめ月つきの功こうもたぬの
 かりて獨ひとり人ひとにて私わたしをあら
 ちり此こゝ後ご人ひとに後ご指さしを
 を計けい殺ころす我われも死したんと思おもひ極きまめ

して口くちを抜ぬき死しむも憑よ附つ人ひとた
 思おもひ色いろを失うはれ表あら
 が忽たちまち狐きつねの落おちて本ほん性じやうに
 殊ことへ終しまつて中ちゆう紙し物ぶつ詰つめして墓むすめ月つきの
 事ことを演ある快くわい心しん一ひと得とく舟ふねに曉あつて
 傳つたへる石いしの墓むすめ月つき乃すなはは神かみ妙めうた
 神かみ妙めう乃すなはは石いし乃すなはは精せい一ひと毫ごうの
 想そうも虚こゝろく漢かん乃すなはは一ひと心しん地ちより生まず

汝況に夢日を傳てん更ませりと自じ快くわい自じ負ふの念ねん
 魚ういありぬらつて心を精せい一いちにせず夢日じつの傳てん
 をためて其こはそのを知ちる其法はう何なにれと
 所以ゆゑをたらざば神しんがたる若らまず也人ひとを夢
 目めの替かに邪ず狐ふまらり惡あくにせれ細人ひと
 一ひとたまに心を象りら時ときを害し我を
 死しんとと一線せんにおひよ下くだり於一ひと毫ごう
 乃すなはち念を心精せい一いちにちりら下くだりら

傳てん更まちり夢む日じつの法はうのにあらず一切けつのまふ
 廣ひろく通じて其このあらむ心こころの精せい一いちららにありる
 唐たう士し楚そ回かいに楚渠きよ子しとしるものありまらり中
 に大石だいせきのかりを虎こと思ひ牙を毒てここと
 射やらるもどくと金かねを没しぬを飲まらり
 入いるもの虎にあらざるちり楚渠きよ子しと思ひた
 らずぬれ我われが勢の強つよゆへと自慢まん心こころにてる縁
 て射やらるに金かね勢せきを柄をたけてまられ

初ハ尾しのも思ひはめて解念をく精一を
にして後石をも貫りつ流に石と徹てん思
惟に入眇を擬議とりの念致り人精一の心
とあひをりして石に入ず佛法に刹法と名付
は執として美実の道を統とりてあつげと
れ飛徳が紀昌に射法を叩ゆり時小なる物
をえりくもす丈のでく徹たる物をえりくもす
慈ろが如くる時我に若よ射法を修ん

とろり紀昌其命は法をの丸蠅を本り枝
に擲とくもとをえりくもす之月の後やう如く
たきとてえりくもす之年れ後ふり車り輪の如
くに見ゆると時慈角の弛翅を造り幹を枝
と射法を修致せりくも眼を精一にきく
ひの教をりくもすのまをりて暮月の
神あはぬが精一り心頭より出るまをりて
べくも縁衣に所謂教を別修れ育し

相用トまうもば其神あ不測のあり我
汝に傳ふるも其能りよく學んで自得と
べし其神あ何ぞ得ざるまう是のん
もこれと思へ

○伏翼兩端

羽貴之百六十種なり大將鳳凰於門の相乃
本乃もしくは皆從あり翼下のをも其能り

鳥瓜初々 鱈乾乾のともてもが思へ
の鳥物を持もつて其慶をのつらと雀の胡
桃資穀の粟の居有は伊原の其の粟は
粽八百を送もつり其中に伏翼と鮎桶を持
あつてま今度鳥王の婚儀をき新しき
の後に世間と布る物を秋にもつるもの懸
藤のこけ、鮎ちりむり、魯の表公十四年大
野に狩せしむり、時叔孫氏が車士鉏高と云



面景十册子卷之三

十五

麋を投得る干物にせしを我々に
 傳く持より其麋に遠のるれ其時代
 小孔子の月利してを給ひてよらて春
 秋の書を作り給ふまのぬ給ふ人の初
 下也風をがえ汝が奇代のる物るるをれ
 ども麋の毛喪之百六十種の大将たり汝も
 まより麋の功経るりのるもが麋の部下
 にて獸の中也その部類に非ずえられは

非類り汝より何れも交てさやうなり其に麋
 の聖人の時代に見るの仁獸たり我を肉を
 食ふに忠の守志で持海るべし伏翼がさる
 乃いよ下りるも也さるる其甲そのびうん
 之用にも麋麋の部下も是れ其年の功を經
 て遠化を人より翼を付てりい此の自在
 を得れば今にての獸の部をもるれ其を
 の部も其明也其も其が一類をに度し

くらきまの田圃化して響とありこれ其地也
 あり雀海中に入ら蛤とあり時の況にその
 部をいりて甲斐之百六十種の中に入ら
 亀の部下とあり時に居た右への雀れまを
 揚て蛤とあり乃部と一終ふや寂りとあり
 くらきをいりて鳥の部に非ずとの終ふとは
 理也と詞を巧み一女舌に任まらむい釋
 ば風を伏翼が我を詔とありらむら

石にありれば強く答に伏翼がよに任せ宥
 怒して其物物を清納とありそのおとも
 の大将麒麟が方に終終大宴あり報多
 の獸郊殺の因に舎舎とありらむは其を
 はくして樂じ猫の之弦をいそ程の腹鼓座
 八笛を吹馬の太鼓乃役をほと免程猿の月
 をた下瓜藤と一急の波をまきとあり
 狐のこんらの所作とありらむ伏翼の扇

箱はこを持も素す一いつと云い此こ度たび獸どう王わう乃なり昏こん終しゆうを役やくし
 りの鉄てつに假か小せう乃なり物ものさぐり世よに得えたもの
 ありて故ゆゑトともり也なりは麻あし子この齒は昔むかし其その帝ていの
 沛はい代だいに鳳ほう凰おう未ま儀ぎして東とう芝し色しきに止とどまり其そのハ
 阿あ圖とに帝てい瓜かうけて終しゆう一いつが美み帝てい登とう一いつ結けつ
 よ財さいは鳳ほう凰おうを死ししとち故ゆゑあつて其その財さい某たれが
 先せん祖そ持もち侍しやう一いつを以もつ度たび麻あし子こに造つくり故ゆゑトともり
 也なり麒麟きりんが云い汝なんぢが希まれ世よの造つくり物もの役やく也なりと云い

去いるがう汝なんぢの獸どう乃なり邪よこしまにあつたものも其その也なり
 一いつ氣きをれが我われ邪よこしま下の物ものも是こゝ今いまのそ如ごとく
 羽つばさ異いあましがも乃なり邪よこしま也なり非ひ報ほうの物ものより何なにも又また
 づと道みち理りを以もつ依よ翼よくが云いぬ美みある物ものを皆みなを
 の邪よこしま報ほうと一いつ結けつり也なり危あや殆うに也なりねありと云いれども
 乃なり報ほうに非ひず鱗うろこ虫むしの邪よこしま也なり結けつに某たれが翼よくハ
 今いまも乃なりのぬに報ほうせに顔かほハとりも也なりと云いず
 一いつ也なり其そのの氣きも也なり豈いかで獸どうの邪よこしま報ほうもと云いと

女舌に任せしむる様んし寸麒麟人に惹て
 云はちしどと思ふより日外鳳凰が婚終の時彼
 を従とるの名物として我肉のこけり難と名
 付て名もさすられ腐肉を飲トそそふかのれ
 が翼わりの爪指みしてさぬくといひ廻り鳳凰
 一盃燗らせしんはとそこの部類へ入るる今
 入我りしもあらて獸乃影也といひ様むと
 今の部類ともたり獸の支族ともたらて鳳

鳳に遊遊し我に軽薄し其間に於て阿
 阿諛ひるのまじが身を利せんし寸所謂換
 乃もそのまじあはれをも持とるの曲物たり
 之獲味道揚光遠が面影をうつとらはれに
 其類邪の倭人たり阿黨乃返まあり近ハ吾
 朝建武の比にありし赤松赤心守新文を連
 足利を義が輩一時の豪雄といふ彼に附
 此に頼り病ありて金石乃忠義全かり寸中

此も義の兄尊氏に罪を得ていむ方の
 されまゝに遂小姫を前長と名して南帝
 の悔を何諛の中に得まゝ又後小敵とあり
 平治のむくく之位入道頼政義朝の援兵
 に有らざる義朝義平父子の急發を救は
 て軍兵を殲免於其雌雄を見物し源氏
 勝の源氏と輔少平氏勝平氏に附んとあ
 場弘持とらをとらして義平に疑れ同士軍と

一しうれ政一もの大将もさごとく援後乃
 諺を交りせり下下の内股膏茶これあり
 指勢ある人に嬖愛あつる人に諛い前よそ
 褒らうしくとも色が後に貶れこそ皆倭人の事
 あり汝風凰が下へい我肉を献し我下へ風
 凰がね麻子を送れ汝が便倭邪曲にあつら
 事を得んや汝に聖賢の罪人なり四雲の
 首長ら我を化さんとへ膽のたそと匹更也

しきりくろ阿もく不首尾にてまゆり鳳凰が
 せしむる鳳凰も伏翼が陰雲と魚人
 てもあけのびせんうさぎ橋の下故宅より
 け偶に括り今に益のあや手結りた

画新莊子卷之二終

